

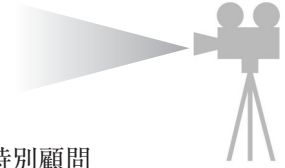


映画漫歩

(第24回：最終回)



ラストシーン ②



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

『禁じられた遊び』（本邦公開53）

今でも空港や大きな駅で、吹き抜きのコンコースを俯瞰する視点に立つと、このラストのシビレが蘇ってくる。第二次大戦の戦渦で突然天涯孤独になった五才の幼女ポーレット。孤児施設に連れられてゆくターミナル駅。混乱でごった返す喧噪。まだ現実が理解できぬ不安の絶頂。喧噪のなかに、ふと現実の一片が蘇り、思わず泣き叫びながら群衆の渦に駆けこむポーレット。その途端カメラはぐんぐんティルトアップし、豆粒のように渦に呑みこまれてゆく小さな命。俯瞰の視点で取り残された観客のシビレ。

『ローマの休日』（54）

夢のような休日から無事王宮に戻った王女オードリー・ヘプバーン。その公式の記者会見。記者とは知らなかったグレゴリー・ペックを見た驚き。しかし王女の品位を保つ儀式的な応酬。そしてそのセリフとは全く裏腹に、万感を訴え、語り続けるその（瞳）。モノクロの光と翳に浮かび上がる（瞳）のクローズアップとカットの切り返し。まさに映像だけが作り出せるシビレ。

『道』（58）

夜の浜辺。波の音だけ。へたりこんだアンソニー・クインの号泣。むくつけき大男の身も世もあらぬ号泣。失ったものの大きさを初めて覚った痛切な悔恨。次第に波音に混じるトランペットの旋律。（ジェルソミーナ）のテーマ。スクリーンを

揺さぶるようなこの（男泣き）は、まだ青二才だった頃の胸の奥まで響きわたった。

『シェーン』（53）

純真無垢な少年が一途に憧憬する西部男シェーン。質朴な農民一家を救う目の覚めるようなガン捌き。傷ついた身を馬の背に、遙かな山脈に去ってゆく後姿。「シェーン、カムバック！」声を限りに叫ぶ少年。黒黒とした山脈の虚しい木霊。かつてアメリカ映画の（華）だった西部劇のテイストが凝縮。任侠股旅ものとも通底し、とりわけ日本人に好かれた。後年、プロ野球の広島カープで同名の助っ人選手が一塁から長駆ホームへ疾走した時、期せずして球場全体から「シェーン、カムバック！」のエールが湧き上がった。

『オリーブの林を抜けて』（94）

初めて出逢ったイランの映像世界。眼から鱗の落ちたカルチュア・ショック。高台に据えたままのカメラ。息を呑むような俯瞰の大遠景。眼下は滴るような緑のオリーブ林。不器用でぎこちない若いカップルがからみ合う双蝶のようにその林に呑みこまれる。もちろん一切セリフはない。しかし、この二人をいとおしむ息づかいがカメラに溢れる。ハリウッドとは全く異質の映画の呼吸とそのかたち。映画のもつ可能性の広がり。

（二年にわたり蛇頭蛇尾。今年は巳年ということでご海容下さい）

「映画漫歩」は本号が最終回になります。2011年4月号より2年間、24回にわたり連載いたしました。ご執筆いただいた桜井修様に御礼申し上げます。